

視点

人手不足を考える



福島県医師会理事

星 竹 敏

人手不足とは何か

自然人類学者の長谷川真理子氏の言に待つまでもなく、その起源は「職業の細分化」にあることは確かです。人類の狩猟採集時代にはこの細分化が殆ど無かったのですが、一定の土地に定住し、都市や文明を築く頃から(定住農業時代)、分業で社会生活を維持するシステムの方が、「効率よく」専門分野の高度化ができることに人類は気が付いたのです。

そして、次なるきっかけは現代資本主義につながる「貨幣」システムの登場でした。

つまり、「自分にできないことを、お金を払ってそれをサービスできる人に依頼する」という、まさに現代の社会の仕組みの根底にある意識がここでできあがりしました。

ただ、それでも一気に貨幣万能の世界になったわけではなく、日本ではここ半世紀の間に、急速に、それまであった「助け合い」の精神が薄まったことで、特に「介護」、「保育」の相互依存扶助の分野ですら、お金でサービスを買うシステムが普通化してしまい

ました。

これらに比して、元々「医学」はサービスを古くからお金で買う以外の選択肢が殆ど無い分野でしたが、ここ半世紀では同じくと言うよりさらに「金次第の治療の細分化」が進んでいます(抗体医薬の誕生など)。

但し、このような「お金がなければ何もできない社会」を望んだのは、我々医療介護関係者ではありません。

残念ながら、それは現代資本主義が生み出す高度サービスを追い求める国民の欲望によるものです。

即ち「人手不足」の根底にあるのは、単純な人間の頭数が少ないということではなく、細分化された高度サービス提供者が国民の望む数に達していないと言う原理です。

具体的には、国民の要望に対するサービス提供者の待遇が悪い、つまり労働評価が低くて賃金が安い分野で、その人手不足という弊害が顕著になります。

特に、現代日本では「介護」、「保育」、「家

事」そして一部の「医療」に低賃金という壁故の「人手不足」が存在してくるわけです。

前述の長谷川氏はそれを「市場のゆがみ」と表現されていましたが、要は国民の評価が低い故に、そのサービスに対する報酬が高くないことに全てが起因しているのです。

思考停止していないのか

皆さんは最近の会合（地域包括ケアとか地域医療調整とか県の医療計画など）で、長い時間をかけながらも会議の結論は「人手不足」にして、問題の先送りをしていることを何度も見聞きしていることと存じます。

まるで、医療介護従事者数が増えさえすれば問題は全て解決するみたいな、もはや絶対あり得ない（人口減の世界ですぞ！今や）幻想で問題をうやむやにしています。

まさに全員で「思考停止」に陥っていると言っても過言ではありません。

少なくとも、「今あるサービス水準の引き下げ」をして、必要とされるサービス提供者の頭数を抑え、労働密度を低下させるくらいの論議がでない会議に意味はありません。

但し、動物は（人類を含めて）、一度上げた生活水準を落とすのは非常に難しいという先人の言葉もありますので、実効性のあるのは、サービス水準の引き下げではなく、賃金の引き上げでのサービス提供者の確保に尽きるかと思えます。

また、頭数の補充については日本の出生率からは、将来は火の車であることは確実ですので、外国人労働者や移民で賄うという策も考える必要があります。

私個人的には移民などでの解決を良しとはしませんが、日本という民主主義国家ではこれからの若い世代の選択になるでしょうから、それに従わざるを得ません。

とにかく思考停止することなく、いろいろな議論を積み重ねなければ、この人手不足問

題の解決の道は見えてきません。

医者の働き方改革は誰のためなのか

この問題も見方を変えれば「人手不足」の根本と同じく、高度な医療の分業化・細分化が進み、その水準を供給できる医師の数が足りないために労働密度が上がってしまったことに始まります。

もっとも、それ以前から、国民の「お願いします」でいいように働かされていた、労働意識欠如の医師達（自分も含めて）の存在が、そもそもの、発端だったのは間違いないことでしょう

即ち、労働報酬の意識の欠如した医師たちが、今の過労死を来す労働環境を育成していたのですから、改善すべきなのは「勤務時間の定義とか時間数」の前に、「医師の労働対価」はどうあるべきかという形而上の議論を国民の中で巻き起こすことが必要でしょう。

それなくしては、今回の宿直、日直論争のように、言葉遊びでの誤魔化しが横行して何ら医師の働き方改革には結びつかないことになってしまいます。

現時点では、国民は「医師の労働負担が多すぎる」ので働き方改革で医師の労働時間が減ることになったら、それによって自分の医療受診が不便になってしまったと解釈することは必至です。

つまりは、医師の働き方改革で、国民は自分が今までより不利な医療受診環境になったら、すぐに怨嗟の聲が、国へでは無く、各医療機関に向かって満ち溢れることでしょう。

とにかく、厚労省官僚のパフォーマンスのためだけに見えるのは、国からの国民への説明がさっぱり容量を得ない上に、メディアも的を外れた報道に終始することから分かります。かように誠意のない「医師の働き方改革」の行き着く先は、さらなる専門医の増加を必要としてしまう（さらなる分業・細分化の方

向となる人手不足の根本に同じ) ために、医師の過剰労働が減ることはないでしょう。

閑話休題：

こんな堅苦しいお話しにお付き合いいただいて有り難うございました。

最後に、私の創作落語をお読みくださって肩の力をお抜きください。

江戸粗忽長屋

第一席

江戸の長屋の朝は今日も粗忽者の八兵衛(通称：八) とこのハチ公よりは少しは学のある熊五郎(通称：熊) のけんかから始まります。

そして、けんかの仲裁は学もあり、政事(まつりごと) にも詳しい大家さんの役割です。

八「なんでい、その**医師の働き方改革のお触れ**って。俺らは字は読めないんだ」

熊「字が読めないのは同じだけど、何でもどこかの藩で医者働き過ぎで死んだんで、お上にとがめられたら、あちこちで似たようなことが多いことが明るみに出たそう」

八「それじゃ、働かせすぎた殿様に腹切らせればいいじゃないか」

熊「そんなこたあいくら何でも乱暴だよ」

八「何を偉そうに言いやがる。なんで出来ないんだよ」

大家「まあまあお待ちよ。八さんや」

大家「熊さんの言うとおりで、調べたら、なんとお江戸のお膝元でも、「医は仁術」の教えを盾に、人の命を救うのが医者仕事だと夜討ち朝駆けで、小石川療養所(病院) に町民が押しかけるので寝る間もないお医者様が多いことがわかったのですよ」

八「おいら、医者がそんなに働いているなんて知らなかったぜ」

大家「江戸開府以来、医者働き方はそれが当たり前と、お上も江戸町民もみんなが思っていて気にも留めなかったせいですよ」

熊「するってえと、そこに気がついたお上はその働き詰めでは医者体が保たねいから、仕事の時間をもっと短くせよ、ってことですかい大家さん」

大家「お上なのか近頃の医者が嫌がり始めたか分かりませんがその通りですよ」

八「そんなあったり前のどこが問題なんですかい。大家さん」

熊「医者の働く時間が減ると言うことは、おいら達を診てくれる時間も減らさざるを得ないってとこでしょ。問題は」

大家「さすが熊さんだね。その通りです。八さんにもわかりやすく言い換えると、今までみたいに、いつ療養所へいってもお医者様が待っていて診てくれるとは限らなくなるってことですよ」

八「夜中はおいらは寝ているから関係ないよ」

熊「このバカハチ公。おめえみたいに頭が空っぽだが体は頑丈な奴ばかりじゃないんだぜ。この世の中は」

八「何だこの野郎」

大家「まあまあけんかはおよしよ。熊さんの言うとおりで、この世には重病になる方が必ずおられ、いつでも診てくれる療養所は絶対必要なんですよ」

八「じゃあ困ったらどうすればいいんですかえ？」

大家「お茶を飲んで待つことです。それ、よく言うでしょ、急須で入れれば通ず(窮すれば通ず) と」

お後はよろしいようで

第二席

八「小石川療養所で診て貰ってる、おいらの

ダチの留公が待ち時間が長くて、一日がかりになっちゃうので、大工仕事が出来ねえとほざいていたが、なんでそんなに医者には患者を待たせるせいでえ、熊さんよ」

熊「アホか。おめえに三つからひとつを選ぶ問題を出すから答えてみねえ」

熊「まず一番目、医者は裏で手伝いのお女中衆といちゃついているので患者を数多く診れねえ。二番目、お茶のみをして休んではかりいるので時間を食う。三番目、忙しくて昼飯も食わずに患者を診ているが患者の数が多くて捌き切れねえ。えー。八よ」

八「ばっ馬鹿にするねえ。そりゃ三番目だろうよ」

熊「さすがにその馬鹿頭でもわかるんだ」

八「馬鹿にするにもほどがあらあ(怒る)」

大家「まあまあけんかはおよしよ。その件は皆が分かっている、なかなか解決策が出ないそうだから。お医者様の玄庵先生にでも又お聞きしましょうや」

一同うちそろって、玄庵先生の診療所へ
大家「ごめんなさいまし。またお聞きしたいことがあって参上致しました」

玄庵「おうおう、別にかまわんが今度は何かな」

熊「八のやろうが診察で人を待たせるのが長いのはどうしてだというんで、患者数が多くて医者が捌ききれねえからと答えたんですが、大家さんが、その解決策が出ないのは何か奥があるに違えねえので玄庵先生に聞いたほうが早いとなりまして」

玄庵「さすがは善兵衛殿。これは古くて新しい解決の難しい問題なのじゃ(ため息)」

一同「…?」

玄庵「世に病の数は多けれど、俗に言う死病はそれほどあるわけではない。つまり、重病者を診るだけなら、数が少ないので医者は患者を待たせることなどはない。しかし、人は生活に余裕が出てくると、医学の進歩

の恩恵を求めて、ちょっとした体の不調も医者に診て貰おうとなるのはこの世の習いなものじゃ」

熊「つまり気軽に医者にかかれれば行く人が多くなるのは当たり前えと」

玄庵「うむ、そこに診察代を含めた薬代が、小遣い程度ですめば、療養所へ行く患者の足を止めることなど誰にも出来ぬ道理じゃ」

大家「もしや、玄庵先生。お医者様にいつも掛かれ、安いお代ですむのは、昔より良い世の中になった証拠とおっしゃりたいんでは」

玄庵「善兵衛殿。その通りじゃ。昔のようにバカ高い薬代なら誰も医者になど来ぬわ」

八「でも長い待ち時間なんて、江戸っ子のおいらは真っ平ごめんでガンスよ」

熊「うるせえ、八。おめえは薬代が高くて払えずに死んでもいいってか」

大家「まあまあ、なるほどよくわかりました。でも何か策はございませんでしょうか」

玄庵「うーむ。気を大きくして待つ心がけくらかのう。特に、懐を暖めながら待てば良いことがあるかもしれぬ。それよく言うであろう。持てば懐炉の火よあり(持てば海路の日和あり)と」

お後はよろしいようで

第三席

熊「玄庵先生に診て貰っても、あっしは怪我だから打ち身の膏薬代を払うくらいだから、いつもお代は高がしれているが、世間では薬代が高くて払いねえので娘を奉公に出したなんて昔から話があるのはどうしてなんですかえ。大家さん」

八「おいらはそんな話は知らねいよ」

熊「このバカハチ公。殺しても死なねいおめえじゃ話になんねいよ」

大家「ほらほら、けんかはおよしよ。今から

教えてあげるから」

大家「権現様(家康公)は朱子学を学問の中心と決めたことは知っているね」

熊「学のねえおいらでもそれくれえは知ってますよ」

八「…」

大家「つまりは儒教という孔子様の教えの流れを継いでいるので「医は仁術」、弱いものを助けるのは当たり前で、お医者様は町民からはお金などを取ってはいけない、というのがお上の定めです」

八「ウふおー。只で医者にかかれるってわけがガンスね。嬉しいな」

熊「うるせえ。それじゃ医者はみな夜逃げだろうから、大家さんに伺っているんだ」

大家「熊さんの言う通りで、建前通りでは医業が成り立たないので、お上は診察料、技術料などを薬代の中に入れることを黙認してきたわけですよ」

熊「なるほど。馬鹿高い薬代というのはそんな裏があるんですかえ。でも、玄庵先生は、そんな高いお代は取らねえでガンスよ。そんな余裕がある様じゃ見えませんが」

大家「おまえ達貧乏人から十文、二十文位取ったって、やっていけるわけなどありませんよ。とにかく、薬代はお医者様の言い値ですから一診療千両とふっかけても、お上のおとがめはありません」

八「せっ千両」

熊「名医にかかって治れば、鴻池や御用達の両替商なら出せるってことでやんすね」

大家「そう聞いてますよ。藪井竹庵先生には出さないでしょうがね(笑い)」

熊「じゃあお金持ちが余分に払わねえ時は、貧乏人にはしんどくなるってことですかえ」

大家「その通りです。それで浅草の戯作者が遠い未来には、皆が頼母子講のようにお金を出し合って、その診察費用をまかなう夢物語を書いていますよ。勿論、お医者様の診察のお代にはお上が上限額を定めて安くするんだそうですが」

熊「その夢の社会で貧乏人はそれでいいんでしょが、頼母子講となると金持ちも出すのは同じ少額で済むんですかえ。それじゃ、金は足りねいと思うんだけど」

大家「熊さん良いところに気がついたね。何でも国民皆保険制度とか戯作者は言ってましたが、町民が調子に乗って何でもかんでも掛け金を払ったから診てくれではすぐにお金は足りなくなることが問題になるんだそうです」

熊「それじゃあ、未来でもやっぱり金の問題は付いて回るんですかえ」

大家「でもお金の心配なしで安心してお医者様にかかれるのは夢のような安心できる社会ですよ。それ、金の貸し借り不安(不和)の元と言うでしょ」

お後はよろしいようで